信仰の元一日を振り返ろう

――元があるから、今がある――

真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546－0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話　06（6702）1980
FAX　06（6700）1854
Eメール　shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所　天理時報社

元というは、古きものは大切にすれば花が咲く。大木々々と人間ばかり、花咲くも、その元ありてよりある。古き元あればこそ大切。元無くてはならん。

明治22年10月10日

私たちにはそれぞれ「信仰の元一日」があります。信仰初代の方も、代を重ねた方も、「大きな身上をたすけていただいた」「事情のもつれを解決していただいた」「不思議な御守護を目の当たりにした」などと、きっかけはさまざまですが、親神様からこの道にお引き寄せいただいた元となる日があります。

しかし、年月を重ねるにつれて最初の感激は薄れてしまいます。ましてや代を重ねると、自分がたすけられた本人でなく、なおさら喜びは感じられなくなるでしょう。

だからこそ、時には、信仰の元となった出来事を思い起こし、改めて感謝の心や御恩報じへの誓いを新たにすることが、信仰を続けていく上で大切になります。『眞明芦津の道』などの教会史を繙（ひもと）くことや、初代のゆかりある地へ実際に足を運ぶことも、そのきっかけとなるでしょう。

私たちの今は、親々の真実の積み重ねの上に成り立っています。先人たちが通ってきた道を振り返り、今の勇みに変えることが、元一日を学ぶ意味ではないでしょうか。

四方正面

「親思う心にまさる親心」若い頃、近所のおばあさんから教えてもらった言葉である。調べてみると、吉田松陰が詠んだ歌の一部だそうだ。子が親を思う心よりも、親が子を思う心のほうが深いという意味。親心を上手く表現していて、とても良い言葉である。

にち〳〵にをやのしやんとゆうものわ　たすけるもよふばかりをもてる

（十四号　35）

とお教えいただく。人間の親である親神様は、私たちをいつもお見守りくださり、私たちがどうしたらたすかるのかを思案してくださる。身上、事情等を通して、私たちが成人できるようにとお導きくださっている。本当に有り難い。

私たちは、少しでも「をや」である親神様にお喜びいただき、ご安心していただける通り方をしたいものだ。（川）

《5月月次祭　挨拶》

今はおたすけの理づくりと陰の徳積みに励むとき

大教会長　井筒梅夫

皆様方には日頃はそれぞれのお立場から、時旬の御用の上にご丹精をくださいまして、誠にご苦労様に存じます。

今年は梅雨入りが観測史上最速であったようですが、その中にも爽やかな五月晴れのお恵みを頂きました。コロナ禍の大変な中を大教会にご参拝くださり、恙なく勤めさせていただけましたことは、大変有り難い次第です。月次祭にあたりご挨拶を申し上げます。

明治12年5月14日は、教祖より眞明組の講名を拝戴した記念の日と定めた日であります。当時は、梅治郎初代様を先頭に、先人は身上や事情に悩み苦しむ人々に積極的ににをいを掛け、手を差し伸べておたすけに奔走しておられました。そして、教祖にお喜びいただきたいという信仰から、ぢば、お屋敷に真実を尽くし運ばれていたことはよく承知しているところです。

当時、教祖が最も急き込んでおられたのは、かんろだいの石普請でありました。信者たちは、初代様の自宅や本田寄所に毎夜のように集まって、かんろだいの献納を相談しておられたのです。実際にかんろだいの石出しのお役を眞明組が頂いて、ひのきしんに精を出されたのがこの5月で、これが当時の眞明組の姿でありました。

それから140年経って、当時の人々の勇んだ道の動きを推し量ると、コロナで十分に動けないことを差し引いても、今の私自身の日々と現状が大変申し訳なく思えてきました。

そこで、講名拝戴当時の情景を思い描いて、初代様の信仰に少しでも立ち返ることができるように、「先人に負けない勇み心でたすけ一条につとめること」を、親神様・教祖、そして祖霊様にお誓い申し上げ、「初代様や先人の勇んだ動き、担われたような御用をお与えいただきたい」と、お願い申し上げて、この月をスタートいたしました。

その足で講名拝戴を偲ばせていただこうと思い、記念建物に行きました。教祖が講名をお渡しくださった中南の門屋のお居間は、普段は閉じられているのですが、ちょうどこの日は、お掃除の日でありまして、お部屋を拝することができました。この10畳のお居間の窓側に教祖がお座りになる一段高い台がありますが、「教祖はその台座に御端座なさって講名をお渡しくださったんだな」「その御前のこの場所に初代様や先人は平伏して、これをお受けになられたんだな」「その時の感激の程は、いかばかりだったのだろうか」などと考えますと、大変感慨深いものがありました。

皆様方にも信仰初代があり、これまでの道すがらがあります。これにゆかりのある所へ足を運び触れることで、初代や先人の信仰を偲ぶことができ、お互いの信仰の励みにもなります。講名拝戴の機会に、こうした試みも一考だと思います。

こうして5月がスタートして、すぐにおたすけが2件入ってき

ました。初代の道は、すなわちおたすけであることを肝に銘じさせてくださったような気がいたします。

どのような状況でもできるおたすけがある

まだまだコロナの感染は厳しい状況です。相手を前にしてのおたすけが難しい場合でも、お願いづとめに心を込めて勤めることはできます。電話やメール、手紙などの通信手段を活用して、相手の苦しみや悩みに耳を傾け、いたわり励まして、教祖の教えをお伝えすることもできます。また、おたすけ相手の御守護を願って、日参や十二下りのてをどり、ひのきしんやつくし・運びなど、その人のために心を定め、実行することも立派なおたすけです。

お道の信仰の有り難さの一つは、どのような状況でも各々にできるおたすけがあることです。お互いにおたすけを常に心掛けて通らせていただきたいと思います。

このコロナ禍はいつどのように治まっていくのかは誰にも分かりませんが、いずれは終息するときが来るでしょう。

日本国内ではワクチンの接種は遅々として進んでいませんが、成人の半数以上が接種を済ませているアメリカでは、今年中に集団免疫ができるということが期待されており、ワクチンを接種した人は7月からマスクをせず、ソーシャルディスタンスを取らなくてもよいようになる、との報道もありました。日本国内においても、ワクチンには一定の期待が持てるのは事実であると思います。

そうなれば、本部の月次祭の参拝をはじめ、あらゆる信仰活動を元に復することができ、おたすけや丹精に堂々と動き回ることができるようになります。これを思えば、今はその日のための伏せ込みの期間として、理づくりと陰の徳積みに励ませていただくときだと思います。

世間では人に見てもらえない、褒めてもらえないところでは何もしたがらないのが普通の感覚でしょうが、お道を信仰するお互いならば、そういうところでこそ、ひのきしん精神で徳を積ませていただきたいものです。

また、普段は原典を開いて教理の勉強をする機会は持ちにくいものですが、今の時期には教典を学ぶ機会や、お道の本に親しむ機会をつくれると思います。改めて教えを治めながら心の成人に努めることも、おたすけの大切な理づくりになると思います。

ようぼくの本分は何といってもおたすけにあります。おたすけは初代や先人の後に続くようぼくの道であります。

これから先、お互いにようぼくとして勇んだ働きができるように、常におたすけを心掛けながら、今の時期に一人ひとりにできる理づくりにコツコツと精いっぱい勤め励ませていただきたいと思います。どうか一層のご丹精をお願いして、挨拶とさせていただきます。

（要約）

《5月月次祭　神殿講話》

家族の絆を深めるチャンスに
信仰の喜びを伝える努力を

役員　加世田　洋

日々が大事

昨年、依頼を受け、『陽気』９月号に「災害時のたすけ合い」というテーマで原稿を執筆しました。

今年で東日本大震災が起こって10年になりますが、その半年前に、奄美大島で50年に一度と言われる記録的集中豪雨によって大きな被害が出ました。

その際に、災救隊の活動と共に多くの方の支援を頂き、そのときに受けた恩返しにと、東日本大震災の復興活動へ出向いた一連の内容を書かせていただきました。

刊行後、いろんな方から「災救隊は本当に素晴らしい活動ですね」などの声を掛けていただく一方で、「もうちょっといい写真なかったの」と、文章の内容ではなく、私の顔写真についての意見を数人から頂きました。確かに改めて見ると、何とも不自然な笑顔をした自分が写っていました。

このことから、日々私はどんな顔をして過ごしていたのだろうかと、考えさせられました。教会長という立場から、人には「陽気ぐらし」と言葉にしながら自分の姿はどうだったのだろうか。どんなに口で「陽気ぐらし」と言っても、周りの人はその人の日々を見ています。特に身近な人になればなるほど、夫婦、親子、兄弟、そして何よりも親神様が見ておられることを忘れてはなりません。おさしづに、

世上から見て成程あれでこそと言う心をめん〳〵持ってすれば、日々に皆んな受け取る。

明治23年5月6日

と、親神様の教えに沿った日々を通る中に、周りから成程と言われるようぼくへと、成人させていただけるとお教えくださいます。

また、

誠の心の理が成程という理である。

明治21年11月11日

と、人をたすける誠真実の心を持って通ることの大切さを、お教えいただいています。自らの写真を通して、日々が大事であると心して通らせていただきたいと思った次第です。

さらなる理の立つおつとめを

平成29年のかんろだいのふし、翌年の真柱様のご身上、そして、この度の新型コロナウイルス感染拡大による月次祭参拝自粛。これら一連の出来事は、決して偶然ではなく、親神様からの厳しいお知らせであります。ご本部月次祭に帰らせていただくとかんろだいの前で参拝ができる。別席を運ぶとおさづけの理が拝戴できる。こうしたことが当たり前になり、当たり前という惰性に流されていたのかもしれません。

昨年の４月、毎月のように夫婦で大教会、おぢばへと帰参しましたが、その間に１回目の緊急事態宣言が全国に出され、奄美大島でも、島外から帰省した際は２週間自宅待機をするよう、自治体から促されました。おぢばから奄美大島に戻った私たち夫婦は、空港に着いてそのまま信者さんが貸してくれることになった家で自主待機をすることになりました。

自主待機中、何もできない状況でしたが、家を貸してくれた方のお陰で教会に迷惑をかけずに済んだこと、教会家族をはじめ、ようぼく、信者の皆様のお陰でこうして待機することができていることなど、さまざまなことに改めて感謝を感じる時間を与えてもらいま

した。時間だけは十分にありましたので、普段お世話になっている方々にお礼の手紙を書かせていただきました。

そうして待機期間も後半に差し掛かった頃、部内の会長が身上から急遽入院という連絡を受けました。おたすけにと思いましたが、病院は家族ですら面会ができない状況であると聞き、教会ではお願いづとめを勤めてもらい、私たち夫婦もおぢばを拝してお願いづとめをさせていただきました。

おふでさきに、

月日よりせかいぢうをばはたらけばこのをさめかたたれもしろまい　十六号　63

それゆへにこのしづめかた一寸しらす一れつはやくしやんするよふ　十六号　64

つとめてもほかの事とわをもうなよたすけたいのが一ちよばかりで　十六号　65

親神様はどれほど残念立腹の思いが積もっても、おつとめこそたすけの筋道であるとお示しくださっています。

各教会においてはコロナの現状を踏まえ、月次祭のおつとめをどのように勤めるのか、その判断に頭を悩ませながら勤める状況が続いています。それは、それぞれの教会が、たすけの根源である尊きおぢばの理を頂戴するおつとめがしっかりと勤められているだろうか、と思案する時間を与えていただいたのかもしれません。今一度ご本部、大教会、それぞれの教会の月次祭、日々のおつとめにおいて、コロナの一日も早い収まりと身近な身上・事情の方の御守護を願って、理の立つおつとめを心して勤めさせていただきたいと存じます。

「感謝」と「報恩」の心で

これはある教会子弟の話です。彼は教会で生まれ育ち、小さい頃から「こどもおぢばがえり」「学生生徒修養会」などに参加し、親神様の存在を頭では理解していました。高校卒業後、関東で就職してからは、自教会とも疎遠になりましたが、兄弟の声掛けもあって休みの日に別席を重ね、おさづけの理を拝戴しました。しかし、その後はまた仕事中心の生活となり、だんだんと連絡さえも取れない状態となりました。

そうした状況の昨年6月、職場で突然意識不明で倒れ、緊急入院となりました。本人は全く意識がなく、目が覚めたときには鹿児島から家族が駆けつけてきており、職場の同僚から話を聞き、大変なことが起きていたことが分かりました。

検査の結果「脳動静脈奇形」との診断で先天性の病気だと告げられ、いつ脳の血管が破裂してもおかしくない状態であるということから、2回に分けて手術が行われることになりました。1回目はカテーテルで破裂しそうな血管にセメントを流し込み、破裂するのを防ぐ手術。2回目は開頭し、セメントを流した血管を取り除く手術でした。手術に合わせて教会ではお願いづとめが勤められ、駆けつけた家族も近くの天理教の教会へと足を運び、お願いづとめに掛かりました。2回とも8時間から9時間という大手術でしたが、無事に終わりました。医師からは「麻痺が残るかもしれない」と告げられていましたが、不思議にも何一つ麻痺も残らず、数日で無事退院となりました。

彼はこの身上を通して、家族をはじめ、教会関係の多くの方が自分のためにお願いづとめをしてくれたことを聞き、何か自分にできる恩返しをさせていただきたいとの思いから、修養科に行くことを

定め、昨年入科しました。

修養科で改めて教理を学び、自分のいんねんを思案したとき、今回の身上は道から離れていたところから引き戻すための親神様の大きな親心であること。今のこの姿は決して当たり前ではなく、親々がこの道を通ってきてくれたお陰であること。さまざまなことに気付き、感話の時間には自然と感謝の言葉が出るようになりました。後日、上級教会へ送られたメールには「教会に生まれてきて本当に良かった」と記されていました。

教祖は、

一代より二代、二代より三代と理が深くなるねで。理が深くなって、末代の理になるのやで。人々の心の理によって、一代の者もあれば、二代三代の者もある。又、末代の者もある。理が続いて、悪いんねんの者でも白いんねんになるねで。

『稿本天理教教祖傳逸話篇』

90「一代より二代」

と信仰する上で代を重ねることの大切さをお教えくださっています。彼の曾祖父は信仰初代として、また教会長として多くの人をおたすけされました。

その後二代、三代と代を重ねる中に深いいんねんの姿を見せていただき、教会は大きな事情となり、家族は次々身上のお手入れを頂きました。その中、彼の父親が事情復興に向けて伏せ込まれた種が実を結び、教会は復興の道へと進むことができたのでした。こうした親々の真実の伏せ込みが、大難を小難へとお導きいただいたのだと思うのです。

その後、彼はまた関東に戻り、元の仕事へと復帰しました。職場の仲間は天理教のことを知らない人ばかりで、彼を取り巻く状況はこれまでと全く変わっていません。しかし彼自身は、これから仕事先や、身近なところで身上や事情で悩んでいる人がいたら、今回自分がたすかった話を伝え、自分にできるおたすけをしたいと、勇んで戻っていきました。

彼は元々頭では天理教のことを理解していました。しかし、周りが天理教のことを知らない人ばかりの中での生活へと変わってからは、だんだんと信仰から離れていってしまいました。その中、身上をきっかけとして改めて日々元気に生活ができているのは、親神様の大きな御守護と、親々がこの道の上に伏せ込まれたお陰ということに気付き、そこから「感謝」の心が生まれ「報恩」の道へと進むことができたのだと思います。

本年は「眞明組講名拝戴140周年」の年。大教会長様は春季大祭において「初代から今に続く道の後を歩む私たちは、常に感謝の心を忘れずに、初代や先人がそうであったように、勇んで報恩の道へと進ませていただきたい」と仰せくださいました。この節目の年にお互いの信仰初代をはじめ、親々がたすけていただいた御恩からたすけ一条に進まれた姿を手本として、今を通る私たちも「感謝」と「報恩」の心をもって歩ませていただきたいと存じます。

家族の絆を深める旬

現在はステイホームが求められ、家族で過ごす時間が増えています。しかし同時に、家族間でのトラブルや事件に発展する等の問題も増えてきていると聞きます。改めて夫婦、親子といった家族本来のあり方を思案すべきふしを見せていただいているように思います。

各教会、ようぼく家庭にとって大切な育成期間であります「こどもおぢばがえり」は、昨年に続き本年も中止となりました。

「こどもおぢばがえり」は昭和28年、おやさとやかた建設に伏せ込む大人たちが、道の次代を担う子供たちに、たとえ一荷の土でも運ばせてやりたいという熱い思いから提唱された「こどもひのきしん」に始まります。昭和29年には「おぢばがえりこどもひのきしん」として夏休みに開催され、昭和31年、教祖七十年祭の年より名称を「こどもおぢばがえり」に変更し、「土

持ちひのきしん」を中心に、「おやさとやかた行事」や「お楽しみ行事」を加えて、今日へと続いてきたのです。

「こどもおぢばがえり」の始まりはおぢばに帰ってひのきしんをするというシンプルなものでした。身近な子供たちにひのきしんをさせてやりたい、将来への徳を積ませたい、との思いでおぢばへ連れて帰ったのではないでしょうか。

本年も「こどもおぢばがえり」への参加はできなくなりましたが、おぢばの参拝が制限された訳ではありません。大勢での帰参ができないのであれば、まずは教会子弟、ようぼく子弟といった身近な子供たちと家族毎におぢばに帰り、参拝をさせていただく。

また回廊拭きなどのひのきしんもできます。お楽しみ行事はありませんが、子供たちにとって将来の大きなおみやげを頂戴できるものと思います。

日曜日やこれからの夏休みを利用し、家族毎でおぢばへ、あるいはおぢばの出張り場所である土地所の教会へ足を運ぶ機会にしていただきたいと思います。

信仰の喜びを後に続く者に伝えていくことは親としての使命です。家族での時間が多くなっている今は、改めて大切な家族の絆を深めるチャンスと捉え、我が家の信仰の元一日や自身の信仰の喜びを、後に続く者に伝える努力をさせていただきたいと存じます。

大教会では今年10月23日を「講名拝戴記念秋季大祭」として勤め、10月24日を「講名拝戴記念おぢば帰り」の日と定めています。まだまだ先が見えない状況ではありますが、こうしたふしの中から親神様の親心を悟り、ようぼく一人ひとりが一歩成人をさせていただけるよう、この節目の年にそれぞれの信仰の元一日に立ち返り、たすけていただいた喜びを我が喜びとして「感謝」の心で、それぞれの立場の上でできる「御恩報じ」の実践に励ませていただきましょう。

（要旨）

立教百八十四年　五月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には一れつ可愛い子供をたすけ上げたいとの親心から十全の御守護にお護り下され、時には厳しい節を与えてまでも心の入れ替えを促されて、成人の道をお導き下さいます御慈愛の程は、誠に有り難く勿体無い限りでございます。私共は、思召にお応えさせて頂きたいものと、日々胸の掃除に努め心の成人に励ませて頂いておりますが、その中にも今日の吉日は、おぢばよりお許しを頂きました尊き日柄でございますので、只今よりお役に与かる者一同、心晴れやかに座りづとめ、てをどりを勤めて五月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には今日を大切な一日と参らせて頂きました芦津の道の子達が、日頃賜る御厚恩に御礼申し上げ、おたすけの心を沿えて共におつとめに勇む真心の状をも嬉しく御照覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますよう御願い申し上げます。更には、神前に願い出ます身上たすけ、事情治めの上には、人をたすける誠の心をお受け取り下さいまして、不思議自由の理をお垂れ下さいますよう御願い申し上げます。

教祖から眞明組の講名を拝戴してより丁度百四十年を迎えて私共をはじめ芦津の理に繋がる教会長、ようぼくは、改めて初代や先人方の信心のご足跡に思いを馳せて、各々の信仰の元一日に立ち返り、先人に劣らぬ勇み心で信仰の道に励み、たすけ一条に真実を尽くさせて頂く決心でございます。

何卒大らかな御心にこの心根をお受け取り下さいまして、先人先輩の後に続くたすけ一条の道を厚き御守護にお導き頂き、日々月々年々と、着実に伸び広がる道をお連れ通り下さいますよう、一同と共に慎んで御願い申し上げます。

尚、世界に蔓延しております感染症は未だ先が見えない状況にありますが、何卒親神様の尊き理を以てコロナに悩み苦しむ人々をおたすけ下さり、一日も早く終息へとお導き下さいますよう、そしてこの大節から陽気ぐらし世界に向かって勇んだ芽が吹く御守護を賜りますよう重ねて御願い申し上げます。

シリーズ　夢――未来を拓くために

第１回　新任教会長の夢

梶川和人（和鎭分教会長）×**瀧本一太郎**（兵庫眞洲分教会長）

今自分ができることに一生懸命取り組むことが、将来への伏せ込みとなり、やがて大きな実りとなるでしょう。未来を夢見て、今どう動くのか。就任したばかりの若き教会長が夢を語ります。

――今の心境はいかがですか？

瀧本　会長になって２カ月経ちましたが、嬉しいという気持ちがまだ大きいのと、また環境の変化に慣れるのに四苦八苦しています。前会長である父が大教会に伏せ込むことになって、教会のことはすべて任されたのですが、会長になって初めて「ああ、こんなことまでしてくれていたんだな」と分かって、前会長の存在の有り難さを、今ひしひしと感じています。

梶川　若い頃に、自分が生まれ育った教会の信仰の元一日を繙く機会があったのですが、それ以降なかなか振り返る機会がなかったんです。会長に就任するにあたって改めて自教会と梶川家の信仰の元一日を振り返りました。すると、歴代会長や信者の皆様のお陰で、結構な状態で私にバトンを渡してくださったことに、感謝の気持ちが湧いてきました。眞明組講名拝戴140周年という節目の年に教会長になったことにも、親神様の大きな思いがあるのかと思います。

そうした代々の思いを引き継ぎながら、これからは時代に合わせて自分の色も付けていきたいと思っています。以前、天理教青年会が「感謝と挑戦」をスローガンに掲げていましたが、今は正にそういう気持ちです。

――教会長後継者として自覚したのはいつ頃でしたか？　また、会長になるまでに心がけてきたことはありますか？

瀧本　私は一人っ子ですので、私以外に教会を継ぐ人はいませんでした。大学からおぢばの学校に行ったのですが、大学３年生のときに身上にお手入れを頂き、たすけていただきました。本当に鮮やかな御守護の姿を見せていただいて、それがきっかけでお道の方に大きく心が傾きました。

自身が心がけてきたことは、おつとめをしっかり勤めることですね。『眞明芦津の道』にもありますが、眞明組当時のおつとめでのおたすけの道に感動して、大学の卒業論文も芦津の初代様の道をテーマにしたんです。

なので「眞明の踊り講の名に恥じないようなおつとめができるように」ということを常に心がけて、毎日十二下りのおつとめを勤めてきました。思いだけでは足りないと思って、行動に移すことを心がけています。

梶川　後継者として改めて自覚したのは、おぢばでの高校生活と、大学生のときに交通事故に遭ったことです。もう少し勢いよくぶつかっていたら即死していたようなところを、骨折だけで済ませていただいた。その時に会長である父から「心を入れ替えなさい」と言われ、初めて父と腹を割って話をしました。

実は、その後も決心し切れずにいたんですけれど、大教会の先生の勧めで青年会本部に勤務したことで大きく心が変わって、教会を継がせていただこうという気持ちになりました。

青年会では出版部に入れて

梶川和人（41歳）

天理大学中退後、青年会本部で３年間勤務。その後、青年会芦津分会委員長、青年会本部実行部員を歴任。現在、少年会芦津団委員、学生担当委員会委員。座右の銘は「心は低く、志は高く」。趣味は２人の息子とのキャッチボール。

いただいて、おふでさきやおさしづを調べたり、原典に触れて、自然と教理を学ぶ環境にいることができました。他にも神様に対する向き合い方とか、人との付き合い方とか、いろんなことを3年間で学ばせていただきました。

ですから、自分で心がけてきたとか、努力してきたというよりも、教えが身近にあって、そういう環境で仕込んでいただいたなあ、という感じです。

あと、自分の中でずっと思っていたのは、「素直でいこう」ということですね。今、いろいろな御用を頂きますが、頼まれたことに対して素直に「はい」と言える自分でありたいということを、伏せ込みを通して学んだので、常に心がけています。そうした心に、見えない神様の働きが見えてくるんじゃないかなと思います。

――教会長になって最初にしようと思ったことは何ですか？

瀧本　4月に奉告祭を終えてすぐ、今年の5月8日で兵庫眞洲分教会は、昭和21年5月8日の創立から75周年を迎えたんです。それを機に、教会に住むみんなでお願いづとめを始めました。

それまでは毎日私一人で、時間も特に決めずに、御用の合間に十二下りをしていたのですが、時間も毎日9時と定めて勤めることにしました。「教会長としてできることはもっとあるじゃないか」と言われるかもしれないですが、自分のような若輩者は神様におすがりするしかないなと思うんです。みかぐらうたに、

ようそつとめについてきた
これがたすけのもとだてや
六下り目　四ツ

とあるように、おつとめこそたすけの根本ですから、何をするにもまずはおつとめをしようと思い、早速実行しています。

梶川　今は、直接信者さんの顔を見て話をすることができにくい状況ですが、『眞明』の編集に関わる中でいろんな方から勧められて、3年前から教会報を毎月発行するようになりました。これを通して、直接お会いできない方には教会報と手紙を添えて、思いを伝える手段にしています。去年なら三日講習会を受講された方の感想を載せたり、教会の皆さんが勇むようなツールの一つとしています。

もう一つは、前会長の頃から、毎月1日に「月例おぢばがえり」を実施しています。部内のようぼく、信者の方々にも声を掛けて、前月のお礼とこの月のお誓いをさせていただいています。今はなかなか大勢集まっての参拝はできないですが、教会家族で参拝をしています。これもしっかりと続けていきたいと思います。

――教会が今より一歩でも前進していくために、心掛けたいことは何ですか？

瀧本　前会長が41年前に兵庫眞洲に来たときは、町で一番のボロ家といってもいいような状態で、地域の方もそこに人が住んでいるなんて思っていないような教会でした。そこから現在の教会を普請して今の状態があるのですが、父に「何をして通ってきたの？いったいどうしたら、こんなふうになるの？」と、尋ねたことがあるんです。すると父は「俺はおつとめしかしてない」と言うんです。それが私の心の底にずっとあって、「何もできない」ではなくて、「おつとめこそが教祖が望まれた一番のことなんだ」と心から思うんです。

これから先も僕にできることはおつとめだけじゃないかなあ、と思っています。もちろん皆さんと通っていく中で、教会として団参をしたりそういうことはありますけれど、まずは信仰の根本として、たすけの根本としておつとめをしっかり勤めていきたい。

今はまだ、教会に住まわしていただいている者から始めたこのおつとめですが、いず

瀧本一太郎（32歳）
天理大学卒業後、少年会本部に4年間勤務。現在、少年会芦津団委員、青年会芦津分会常任委員。座右のおふでさきは「このよふをはじめた神のゆう事に　せんに一つもちがう事なし」。最近は家庭菜園にハマっているという。

れは信者さん方と毎日おつとめを勤められるような教会になれたらいいなあ、と思っています。

梶川　子供が３人生まれ、子育ての真っ最中ですが、子供が教会にいるだけで、近所の方が声をかけてくれたり、物を持ってきてくださったりとか、今まで以上に地域の繋がりの絆が増えたな、と実感しています。やっぱり教会家族から陽気ぐらしの雰囲気を出していきたい。コロナ禍で停滞している雰囲気なので、教会から明るい雰囲気を醸し出していきたい。

和鎭分教会での「おさがり交換会」の様子。正美夫人のママ友を中心とした若い奥様方が集まる。「気軽に敷居をまたげるような教会にしたい」との思いから始まった。

私の就任奉告祭も、教会が大阪市内の中心部にあるので、この時期に人が集まったら不安に思われるだろうと思って、前の日に近所に挨拶回りに行ったんです。ところが皆さん、「どうぞどうぞ」「おめでとうございます」って祝福してくださって、怪訝な顔をされる方は誰もいなかったんですよ。これも親や先人方が地域に根差した通り方をしてくれたお陰なので、それがすごく嬉しかったです。

なので、しっかりと地域に根差した教会にしていきたい。今は不定期ですが、子供を連れて近所のごみ拾いとか、そういう姿を周囲に映していきたいと思います。

――今から15年後、16年後がお道の中で大きな目標とする地点になりますが、そこに向けての大きな夢を聞かせてもらえますか？

梶川　自分の中で３つあります。

１つは、奉告祭で大教会長様がおっしゃったように「陽気ぐらしの手本となる教会、たすけの道場である教会」を目指したい。

もう１つは、月次祭でおつとめを勤めてくださる人を増やして、賑やかに勤めたい。

そしてもう１つ、先ほど言った、もっと地域に根差した教会にしたい。今、コロナになってからは休止しているんですが、以前は２カ月に１回程度、「おさがり交換会」を教会で実施していました。

妻が嫁いできてくれて、「あの教会はあんなことやってるよ」とか、いろいろな情報を聞いてきて、その中で「うちでできることって何やろ？」と相談して、３年ぐらい前から、着られなくなった衣類をお互いが持ち寄って、交換会を始めたんです。もともと妻の幼稚園のママ友のコミュニティから始めたんですが、それをきっかけに教会に来て、「あそこに行ったらホッとするよ」「悩みを聞いてもらえるよ」とか、気軽に敷居をまたいでこれるような教会にしたいと思っています。

兵庫眞洲分教会では、毎朝９時より教会在住者で十二下りの「お願いづとめ」を勤めている。「たすけの根本として、おつとめをしっかり勤めていきたい」。

瀧本　今、小さい子供たちが親に連れられて教会に来てくれているんですけど、15年ぐらいすると高校生とかになる。私も妻も少年会本部で勤務していましたので、何とかして少年会活動を通して縦の伝道をしっかりやりたい。

これは前会長からも言われておりまして、せっかく今繋がってくれている子供たちですから、その子たちがしっかりたすかる道に繋がっていけるようなお手伝いを、夫婦でさせていただきたい。教会を挙げてその子たちの育成に力を注いでいきたいと思っています。

――ありがとうございました。

（聞き手　編集部）

喜びの奉告祭

瀧本晶子会長
日名南分教会

5月9日、日名南分教会（紀周部属・御坊市）は、大教会長をお迎えして、瀧本晶子六代会長就任奉告祭を執り行った。

午前11時、瀧本会長が祭文奏上。「上級教会が日高分教会から紀周分教会に変わりましたが、頂いた名称はそのままに、日名南分教会の歴代会長様と日名南分教会に繋がるようぼく、信者の方々が紡ぎし歴史と、積みしお徳をそのまま引き継がさせていただけることは、有り難く、改めて厚く御礼申し上げます。」と経緯を述べ、「親神様の親心と、溢れる程の御守護を日日しっかりと感じ取り、その御恩に報いるべく、親一条の精神で、この命尽きるまで懸命に御用を担い、ぢば、をやの息にしっかり合わせ、お与えいただいた使命を果たしてまいります」と誓った。

続いて大教会長が挨拶。「陽気ぐらしの手本雛型となれる、笑顔が溢れる理想の教会を目指してもらいたい」と期待を述べられた。

おつとめ終了後、瀧本会長は、「日名南分教会が長きにわたり繋いできた信仰の火を消すことなく、一歩でも成人した姿で次の代にバトンを渡せるよう、懸命に勤めさせていただきます」と決意を語った。

参拝者は20名であった。

五月月次祭　祭典役割

祭主	大教会長			扈者	岩切正義	
指図方	瀧本眞二郎			扈者	竹内義忠	
献饌長	岩切正教			賛者		
伝供				賛者	木村真次	
					瀧本亘	

	てをどり	地方	笛 ちゃんぽん	拍子木 太鼓 すりがね 小鼓	琴 三味線 胡弓
座りづとめ	大教会長　奥田正徳 石川道夫　会長夫人 浜田たつゑ　前会長夫人	井筒文夫 井筒敏成 湯川正圀	守田清一 山本義範 瀧本眞二郎	今川政治 山田道弘 岩切正教	今川和子 榎　理恵子 岡島きよの
前半	川畑澄博　梶川和隆 西本義之　望月恵美 立花章子　松本さだえ	奥田眞治 中村俊和 石川健郎	葭内　浩 立花善文 浜田宣郎	瀧本庄司 吉田裕和 立花善三	瀧本基志枝 宗我邦代 河合遊喜恵
後半	奥田正儀　河合善洋 村田光伸　山本広子 木村理恵　石川石美	今川聖一 湯川正信 吉田裕樹	新居里実 西本興正 岡本久昭	花岡忠和 榎　康紀 梶川芳男	竹内淳子 浜田千代実 加世田陽子

在籍者一同

修養科を修えて《957期》

鳥肌が立つほどの感動

順世分教会
小野田駿平（21歳）

1カ月目は慣れない生活で、やったことのないおてふり、周りとの信仰の温度差、何より一人きりの修養科生活に心が沈み、帰りたいとしか思っていませんでした。

2カ月目、4月から入科した7人の仲間の温かさや親しみやすさと笑顔に救われ、自然と心が勇み、誰かのためにと、目配り、気配り、心配りができるようになりました。そして良い種を蒔くように意識を変えると、見える世界が変わってきました。

2カ月目の半ば、この道は間違いないと感じる出来事がありました。いつも明るく、笑顔で声をかけてくれる同期の女性が、実は拒食症で、天理に来てから1食もまともに口にできていないとのことでした。そんな素振りをみじんも感じさせない彼女の人格の素晴らしさに、何かできることはないかと、一緒にいた友人と3人で心定めをし、毎日お願いづとめを勤めて、心の底からたすかりを願いました。

2週間ほど経ったある朝、彼女が「昨日団子を一つ食べれた」と笑顔で話してくれました。私は全身に鳥肌が立つほど感動し、人のことでこんなにも喜んでいる自分に成長を感じることができました。

真実の心で人のたすかりを願うと、親神様はその真実を必ず受け取ってくださる。御守護を実感できれば、その人のために行動できたことが生涯の宝になるのだと感じられました。

これからもお道と関わり続け、教会や上級の月次祭に積極的に参拝し、兄弟や親戚に教えの素晴らしさを言葉や行いで伝え、教会がもっと賑やかになるように働きかけていこうと思います。

教務部報

教人登録

坂井　央人（畦　川）
坂井　伊紗（畦　川）
立教184年5月25日

教人資格講習会第111回

荒木めぐみ（恵　庭）
段野　渉（大　清）
立教184年5月11日

修養科第957期修了

小野田駿平（順　世）
立教184年5月27日

おさづけの理拝戴《4月》

毛利　太紀（東大屋）
八木　淳成（東大屋）
森山　陽紀（芦　南）
井筒　真彦（直　轄）
加世田　元（大　島）
木村　里香（芦明徳）
〈拝戴順　6名〉

初席《4月》

〈1名〉芦大熊・紀周
〈順序運びより　2名〉

お詫び・訂正

真明617号「教務部報」
初席《3月》
〈2名〉東向　←　南向
の誤りでした。
お詫びし、訂正致します。

月例統計（自令和3年1月1日～至令和3年4月30日）

名称（）内教会数 ＼ 項目	初席	おさづけの理拝戴	修養科修了	教人
大教会（1）	9	2		
靱（13）				
東津（23）	4	2	2	
吉野川（29）				
島原（17）		2		
日方（15）	2			
稗島（8）	1			
本津（2）				
日高（2）				
姶良（5）				
津和（13）				
門司（6）				
當別（6）				
大島（27）	4	3	2	
沖縄（3）				
尼崎（2）		2		
四ツ山（5）				1
大冠（2）				
島下（1）				
天保山（3）	1			
青木（1）				
芦浪（1）		1		
甲邊（1）				
芦華（1）				
天津（1）				
入江（1）				
豊野（1）				
紀周（3）	3			
勝明（1）				
神の島（1）				
兵庫眞洲（1）	1			
芦ノ郷（2）				
本明勇（2）				
明道（1）				
芦東（1）				
和鎭（3）		1		
神滝本（1）				
芦明徳（1）		1		
真明彰化（2）				
本氣（2）				
芦明照（1）				
真伯（1）				
合計（213）	25	14	4	1